

2023年 賀詞交歓会

開会挨拶

会長 上原 正弘

本日はお忙しい中、全国各地よりお集まりいただきまして誠にありがとうございます。3年ぶりの開催ということでやや規模は縮小したものの、こうやって皆さんの顔が拝見できてなによりと思っております。

ご多忙の中、原室長様をはじめとした厚生労働省の皆様、山下製造産業局長をはじめとした経済産業省の皆様、近藤会長をはじめとした高圧ガス保安協会の皆様、そして武田理事長をはじめとした日本医療ガス学会の皆様ならびに医療の関連団体幹部の皆様、また報道各社の皆様にもお出でいただいております。誠にありがとうございます。

さて、世の中は昨年来、新型コロナウイルスの第8波、ロシアによるウクライナ侵攻、エネルギー価格の高騰、さらに円安と引き続き災難に見舞われております。当業界においては、販売数量はコロナ禍の前に戻りつつありますが、エネルギー価格の高騰や物価高によるコスト増で経営的には厳しくなっているという状況です。またご承知のとおり、ヘリウムガスについては相変わらず需給タイトな状況が続いております。皆様にとりましてはもう聞き飽きたよというお話かもしれません。

このような取り巻く情勢は、年が変わったからといってすぐに好転するわけではありません。しかし、せっかくの新年なので何か良いお話ができないかなと考えて、思いついたのが「いちをとる」です。まず、供給タイトなヘリウムの原子番号は2番です。2から「1をとる」と水素になるので、何か新しい未来が見えてきそうな気がします。次に、ロシアによるウクライナ侵攻についても、ロシアの軍隊が元々の国境線の所に「位置をとる」ことで戦争終結に至って欲しいところです。さらに、新型コロナウイルスも2019年に発生したことから、コビッド・ナインティーン（COVID-19）と呼ばれています。この数字の19から「1をとる」と数字の9になるので、コビッド・ナイン、つまりコロナがナイ〜ンということで、コロナウイルスがこの世の中からなくなれないかなとの願いを込めております。

このような厳しい環境下でも当協会は、“モノづくりを支え 命を守る、インフラがある。”のキャッチコピーのとおり、我が国の産業と国民の命を守るためのガスを、必要とされる場所に必要とされる時に安全かつ安定的に供給する使命を負っています。JIMGAの会員会社は、この使命を全うするために今年も精力的に活動してまいります。

当協会の活動について、昨年の振り返りと今年の取り組みに関してお話をさせていただきます。まずは安全についてです。ご承知のとおり、昨年9月にLPGの容器移動中に死亡事故が発生しました。また在宅酸素療法における火災事故も継続的に発生しています。JIMGAでは、事故事例の情報共有や在宅酸素療法火災予防のための啓発ビデオの制作、各種講習会を実施する等、



事故撲滅を目指して今年も積極的に邁進してまいります。次に災害対策です。昨今大型で非常に強い台風やこれまでにない規模の大雨、さらに昨年末には記録的な大雪等、今まで経験したことのない異常気象に見舞われています。南海トラフの大地震や富士山の噴火、これも大きな心配事です。JIMGAとしては会員各社様のBCPの情報、状況を取り入れながら業界団体として果たす役割を模索してまいります。

このように私どもは、いかなる時もガスを供給し続ける覚悟でおりますが、同時に安定的な事業経営を希求しております。経営を圧迫するものは排除したいと考えており、効率的な運営のため、できる限りの規制緩和をお願いしたいと考えています。電力問題に関しては常日頃からお話しさせていただいておりですが、政府に対して電力多消費産業11団体で歩調を合わせ、FIT制度の抜本的な見直しや、エネルギーミックスの見直しについての訴えを続けてまいります。また、規制改革については、現在ASUの遠隔監視、医療用酸素用FRP容器の使用期限の15年から20年への特認化など、6件のテーマに取り組んでおります。是非とも本日まで臨席の監督官庁をはじめとした皆様のご理解とご協力を賜り、前に進めていきたいと考えております。

国際統合化においては、昨年は「往復動酸素圧縮機安全指針」および「ホスフィンの安全な取扱い指針」を発行しました。本年も国際的に協調された基準文書の作成、国内法を考慮したJIMGA指針を作成し、安全や業務効率化に有用な技術基準を提供してまいります。この国際統合化は、IOMAという国際酸素製造者協会の機関である国際統合化委員会（略称：IHC）に参画して進めております。IHCという委員会自体は、アメリカ、ヨーロッパ、アジアそして日本と四つの国、地域を代表する協会で運営されており、JIMGAは日本を代表する唯一の機関として認められていることはご承知のとおりでございます。

最後にJIMGA一体化についてです。昨年より進めております機能別組織への再編と諸制度の見直しによる運営合理化、適正化に向けた活動、いわゆるJIMGA一体化につきまして、今年はいかなる具体的な方策を実施していく段階となります。会費問題だけは少し先延ばしにすることになりました。冒頭「いちをとる」と何か希望のある未来につながるというお話をさせていただきました。当協会としても今年も、2ではなく「1をとる」。つまり一つになるということです。2部門制を排して一体化を進めることで素晴らしい年になると確信しております。より効率的で合理的な組織にして皆様にとっての存在価値を高めてまいりたいと考えておりますので引き続きよろしくお願いいたします。

本年も皆様のご繁栄とご健勝を祈念申し上げまして、私の新年の挨拶とさせていただきます。



来賓ご挨拶

厚生労働省医政局長 榎本 健太郎 様
(代読:厚生労働省医政局地域医療計画課
医療関連サービス室長 原 慎治 様)

皆様、あけましておめでとうございます。ご紹介いただきました厚生労働省で医政局の医療関連サービス室長をやっております原と申します。本来でしたら局長の榎本が参ってご挨拶をさせていただくところでございますけれども、ご紹介ありましたように公務の都合によりまして挨拶を預かってきておりますので、代読させていただきます。

皆様あけましておめでとうございます。一般社団法人日本産業・医療ガス協会の新年賀詞交歓会の開会にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

貴協会におかれましては日頃より医療行政にご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。また平素より医療ガスの安全管理等の取り組みを通じて、我が国の保健医療水準の向上に寄与してこられたことに対し、心から敬意を表します。特に新型コロナウイルス感染症への対応においては医療用酸素の需要が高まっている中、医療ガスの安定供給や医療ガス設備の保守点検事業を通じて医療提供体制の維持にご尽力をいただき、心より感謝申し上げます。

これまでの3年近くのコロナ対応の中で得られた知見を踏まえ、次の感染症危機への対応に万全を期すため、平時に医療機関と協定を締結することを通じて、流行の初期段階から速やかに立ち上がり機能する保険医療提供体制を構築すること等を内容とする感染症法等の改正法が昨年の臨時国会において成立いたしました。また今年、都道府県において2024年度からスタートします第8次医療計画の策定作業を行っていただく年となります。厚生労働省では地域医療構想の基本的枠組みを維持しつつ策定作業を進めていただけるよう、必要な対応を行ってまいります。さらに今後、慢性疾患や医療と介護の複合ニーズを有することが多く見られる高齢者が増加する中で、治す医療から治し支える医療を実現するために、これまでの地域医療構想や地域包括ケアの取り組みに加え、かかりつけ医機能が発揮される制度整備を進める必要があり、現在、医療法等の改正を視野に検討を進めています。

貴協会におかれましては、これまで各種講習会の開催や自治体等との災害時防災協定の締結の推進、在宅酸素供給装置の保守点検事業者向けの緊急災害時における手引書の策定などの取り組みにより、医療ガス等の安定供給や安全管理の徹底に努めてこられました。人手不足、物価高騰が続く中において大変なご苦労もあるかと思いますが、こうした取り組みは安全安心な医療サービスを提供する上で不可欠なものであり、災害時をはじめ今後とも着実な取り組みを通じて、我が国の保険医療水準の向上に寄与していただきたいと考えております。最後になりますが、貴協会の益々のご発展と本日ご参集の皆様にとって本年が実り多き一年となることを心から祈念して、新年の挨拶といたします。令和5年1月13日、厚生労働省医政局長 榎本 健太郎。

3年ぶりの新年の賀詞交歓会、誠におめでとうございます。



来賓ご挨拶

経済産業省製造産業局長 山下 隆一様

ただ今ご紹介にあずかりました、経済産業省製造産業局長の山下でございます。本日は皆様方の賀詞交歓会にお招きいただきまして誠にありがとうございます。

私も製造産業局長という職責上、たくさんの賀詞交歓会に参加させていただいているのですが、立ってやるところもあれば座ってやるところもあり、お酒が出るところもあれば出ないところもあり、かなり事務局の方々の個性が際立つところでございます。本賀詞交歓会はどうかと思っていたんですが、これは、右手を見るとお寿司もあるということで、かなり事務局はいけてるんじゃないかという風に、まず申し上げたいと思います。それから、私、榎本さんとは実は長い間友達でございます。今日はこの場で二人で挨拶ができるといいなあと思っていたので、来られなくて非常に残念です。すごく格調高い挨拶を原室長が代読されましたけども、榎本さんは、実は、あまり言うと怒られるかもしれませんが、いらっしゃらないので申し上げますと、オペラの名手でございます。もし榎本さんがいらしたら、きっとオペラ調でご挨拶をされたらうにと、くれぐれも残念でございます。

今、我々はかなり大きな時代の転換点にいるのではないかと考えております。ネットの力、デジタルの力で世界は近づいてきて、海外とも色々な形、レベルでメディアを通さなくても直接のルートで繋がることによって世界のネットワークが強くなって、良い方向に行くんだろかなという風に思っていたところがあるんですね。ところがそれをぶち壊しましたのがロシアのウクライナ侵攻でございます。少なくとも私が入省してからこれまでの間、世界は秩序だった中で経済活動をしていましたし、我々は生活してきました。21世紀のこのご時世にリアルに戦争ってあるんだなということをつくづくと感じたところでございまして、しかもそれがまだ続いている。これは大きな歴史的な転換点の一つの事例なんだと思います。

もう一つが、皆さんまだマスクをしていますけど、このコロナの問題でございます。これももっと早く終わるんだろかなと思っていましたが、世界中でまだ次から次へと新株が出てきて、これらと共生をしていかなければいけないという状況です。同時にサプライチェーンというものに対する意識が極めて強くなっています。国境や国というものの位置付けについて、だんだん国境ってなくなるよねと思っていたことからすると、全く逆の方向にベクトルが向いて来てまして、これも極めて大きな転換点になるのではないかと考えています。

それから、カーボンニュートラルの問題です。化石燃料を利用することで豊かな生活を実現してきたのが、これまでの人類の歴史だったと思いますが、化石燃料を使わない形でもう一度繁栄していこうというのは、人類をあげてのチャレンジでございます。そういう意味で非常に難しい課題だと思っておりますが、先程と違って世界が協力をして進めなければいけない。それに加えて日本はもう人口減少の中に入っております。これも歴史上あまり経験したこと



がない状況でございます。我々は今や、こういった歴史的にあまり経験したことがないようなことのど真ん中にいるわけでございます。しかも我々は、ここにいらっしゃる皆さんそうだと思いますが、責任世代だと思っています。この問題に対して我々一人一人が答えを出していくということが求められていて、後世の人達から、あの時代の人達は何をしていたんだろう、どんなアクションをしたんだろう、それぞれの会社、役所は何をやってきたんだろうと、問われることになると思います。私もその一員として、何ができるかをよく考えて、肝に銘じて行動していかなければと思っていますところでございます。

そういった中で、日本はまだデフレ経済からの脱却という宿題ですらまだこなせていない状況にあります。まず我々はこの宿題をこなさなければいけないし、挑戦をしていかなければいけないという状況だと思います。昨年末、経済界の方々から非常に力強い見通しが示されました。5年後から年間100兆円を国内に投資をするぞということで、これは非常に心強いことです。なかなかこれまでこういうことがなかったんですね。せっかく民間の方々がこういう力強いお言葉で行動をされるということですから、政府としてもそれを精一杯支援していく必要があるだろうと思っています。それによって民間の力、投資の力をイノベーションに変え、イノベーションを生産性の向上につなげ、生産性の向上を所得の向上につなげていくといった経済の循環を作っていくことが、我々として今年どうしてもやらなければいけないことではないかと思っている次第でございます。政府も昨年補正予算で、複数年の投資に対して7兆円の支援策を講じているところでございます。これを是非活用していただいて、まずは投資、経済活動を強めにスタートしていただければと思います。

それに加えて、先程カーボンニュートラルの話をしました。カーボンニュートラルは多くの産業でコストセンターだと思っている方も多いのですが、これは新しい成長の競争軸になっていくという風に捉えた方が良くと思っています。したがって各国とも予算、税制、金融、そして何よりルール作りには必死で取り組んでおります。先行して世界のゲームに勝ち抜くことが重要であり、経済産業省といたしましても、それに向けて取り組みを進めようと思っています。GX実行会議でロードマップを作っています。基本方針も案ができてパブリックコメントをしている最中です。これを取りまとめて具体的なアクションに移るわけです。10年間で150兆円の官民合わせた投資をしていこう、その中で20兆円規模の支援措置を講じていこうと。ただし、これは規制と支援を一体としてやっていこうという枠組みになっていまして、先行して投資をするところに対して支援をするということでございます。こういう形で制度を作っていくわけ

ですが、これは決して役所だけで制度作りができるわけではありません。水素とアンモニアについては値差支援をやろうということで、具体的な制度の構築に向けて、法案を含めた検討を進めているところです。それ以外の分野も制度措置を作り投資を促していく、予見性を高めて投資を促していくといったことを進めようと思っています。是非ともご協力をお願いできればと思います。



もう一点お願いがございます。経済産業省の最大のミッションは福島の復興です。福島の復興をやり遂げるために、ALPS処理水の海洋放出に向けた準備を進めているところでございます。これを円滑に進めていくためには、漁業者の皆様が安心して事業を続けられる環境を実現することが非常に重要になっています。そのために今、「魅力発見！三陸・常磐ものネットワーク」という官民挙げた枠組みを作っています。生産者と消費者をつないで消費の拡大をしていこうということで、産業界の皆様にも参画をいただいているところでございます。是非とも今日、会社にお帰りになったら、社食で福島のものを使ってみよう等のアクションにつなげていただければ、我々にとって大変に幸せなことでございます。是非ともご協力をお願いできればと思います。

最後になりますが、ここにお集まりの皆様方のご発展とご健勝を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

来賓ご挨拶

特別民間法人高圧ガス保安協会 会長 近藤 賢二 様

皆様あけましておめでとうございます。ただいまご紹介いただきました特別民間法人高圧ガス保安協会会長の近藤でございます。皆様に新年のご挨拶を申し上げます。

今年が癸卯の年で、十干の最後の年であります。こういう時は変化の年だそうでございます。私どもも去年から今年の動きを考えますと、高圧ガス保安法の改正がございました。法律は改正できましたけど、政省令がどうなっていくのか、実行をどうしていくのか、これが今年の大きな課題でございます。そして今、局長からのご挨拶にもございましたようなカー

ボンニュートラルに向けての水素の話がでございます。これは大きな一歩を踏み出す年だと私は思います。まさに変化の年でございまして、うさぎのようにピョンと勢いよく飛び跳ねられるような、そういう仕事をしていかなきゃいかんなど、こんな風に思っているところでございます。

先ほど上原会長から「いちをとる」というお話がございました。私はもうまったく同感でございます。JIMGAだけではなくて私ども高圧ガス保安協会も、それからもちろんご指導いただく経済産業省や厚生労働省も一つになって前進をしていかなければいけない。このように思っているところでございます。私の好きな言葉に、一人の一万歩より一万人の一步という言葉がでございます。一万人で一步を踏み出すことが最も大きな力を生むわけでございます。今日会場にお集まりのJIMGAの関係の方々そして責任省庁の方々、また私どもも含めてみんなで一つになって一步を踏み出す勇気を持つ年にしたい、こんなふうに思っているところでございます。

今年の益々の皆様のご繁栄とご健勝、そして来年また皆様とともに集まることができて、にこやかに皆が去年は良い年だった今年も頑張ろうねと言うようにできるよう、心から期待をし、お願いをして、新年の挨拶とさせていただきます。改めまして、皆さんあけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈りいたします。



乾杯挨拶

副会長 白井 清司

お話をいただきました厚生労働省の原室長、経済産業省の山下局長、KHKの近藤会長、本当にどうもありがとうございます。

3年ぶりにこのような賀詞交歓を開くことになりました。まだコロナが第8波で今ちょうどそのピークが来ているところですが、こういう形で賀詞交歓をさせていただけるというのは大変心強く、今後も是非頑張っていきたいと思えます。皆様のお言葉をお借りしまして、これからがスタートだということで、今日お越しの皆様のご健勝と皆様のご発展を祝しまして乾杯の発声をさせていただきます。



中締め挨拶

副会長 鈴木 慶彦

あけましておめでとうございます。

コロナだけではなくて、先ほどから色々な話がありますように、非常に難しい変化の時代になってまいりました。今までと同じようなことをやっていたらいいということは絶対にないという時代になってきて、そこのところをきちんとやれるかが問われる時代だというふうに考えております。我々の業界は今までのところまあまあマシの方だったと思えますけれども、これからもっともつきつくなる可能性があるということで、十分心の準備をしていかなければいけないと思えます。ただ悪いことばかり考えていても、どうせろくなことにはならないので、少し希望を持っていかなければいけないというふうに考えております。

シューベルトの歌曲で白鳥の歌というのがあります。ドイツリートをご存知の方は、ああ、あれかと思われると思えますけども違います。有名な白鳥の歌という歌曲集ではなくて、ゼンという人の詩にシューベルトが作曲した2分ぐらいの短い曲なんです。その詩の内容というのが、白鳥というのは死ぬ間際にひときわ高く歌う。なぜかというと、来るべき死への恐怖と死んだ後に新たに生まれてくる命に対する希望のためにひときわ高く歌うんだという詩の内容の短い曲です。ここではそれは歌わないことにしていますけども、苦しいことがあるということは、必ずそこに反対の面から見たら希望があるわけです。我々としても、これから苦しい時代になったら、先行きの希望を糧にして頑張っていこうという風に、新年ですのでおめでたいお話にしたいと思います。

これからのJIMGA会員各社の益々のご隆盛を祈念いたしまして、手は何回叩いても感染上問題ありませんので、三本でいきたいと思えます。ご唱和ください。（三本締め）

